

司 式 杉山昌樹牧師

前 奏

奏 楽 五十嵐美代枝姉

開 会 招 詞 詩編95編1-7節

* 賛 美 歌 6:1 (ソングシート)

1. 我らのみ神は天地すべます、国々しまじま喜びたたえよ。アーメン

* 開 会 祈 禱

罪 の 告 白 祈 禱 書 2 罪 の 告 白 ①

神よ、わたしを憐れんでください。御慈しみをもって。深い御憐れみをもって、背きの罪をぬぐい去ってください。わたしの咎をことごとく洗い、罪から清めてください。わたしは咎のうちに産み落とされ、母がわたしを身ごもったときも、わたしは罪のうちにあったのです。わたしを洗ってください。雪よりも白くなるように。神よ、わたしの内に清い心を創造し、新しく確かな霊をさずけてください。救いの喜びを再びわたしに味わわせ、自由の霊によって支えてください。主よ、わたしの唇を開いてください。この口は、あなたの賛美を歌います。主イエス・キリストの御名によって。アーメン。 (詩編51)

罪の赦しの宣言

十 戒 祈 禱 書 4

1. あなたは、わたしのほかに、何者をも神としてはならない。
2. あなたは自分のために刻んだ像を造ってはならない。それにひれ伏してはならない。それに仕えてはならない。
3. あなたは、あなたの神、主の名を、みだりに唱えてはならない。主は、み名をみだりに唱える者を、罰しないではおかない。
4. 安息日をおぼえて、これを聖とせよ。
5. あなたの父と母を敬え。
6. あなたは殺してはならない。
7. あなたは姦淫してはならない。
8. あなたは盗んではならない。
9. あなたは隣人について偽証してはならない。
10. あなたは隣人の家をむさぼってはならない。隣人の妻、またすべて隣人

のものをむさぼってはならない。

(出エジプト20、申命記5)

* 賛 美 歌 6:2

2. みいつの光は世界を照らせり、大地はかしこみみ前にふるえり。アーメン

5 使徒信条

われは天地の造り主、全能の父なる神を信ず。

われは、その独り子、われらの主イエス・キリストを信ず。主は、聖霊によりて宿り、おとめマリアより生まれ、ポンテオ・ピラトのもとに苦しみを受け、十字架につけられ、死にて葬られ、よみに降り、三日目に死人のうちよりよみがえり、天に昇り、全能の父なる神の右に座したまえり。

かしこより来たりて、生ける者と死ねる者とを審きたまわん。

われは聖霊を信ず。聖なる共同の教会、聖徒のまじわり、罪の赦し、からだのよみがえり、とこしえの命を信ず。 アーメン。

献 金 (黒) 教会活動 (赤) 大会執事活動委 70

今献ぐるそなえものを 主よ 清めて受けたまえ アーメン

子どもプログラム

聖書朗読 詩篇37編30-37節 (旧約聖書870頁)

フィリピ1章27-30節 (新約聖書362頁)

説教・祈祷 「不屈の人たち」杉山昌樹牧師

* 賛美歌 87:1, 3

1. 全地よ神に向かい、喜びたたえよ。御名の栄光ほめよ その誉れ歌え。御神に告げまつれみ業おそるべし、主はみ力をもて仇を伏させたもう。

3. 神は勢いもて永遠に続べたもう。その目は国々を見守りたまえり。背く者、嘲りおごることなかれ。すべての国民よ神をほめまつれ。

* 主の祈り 祈祷書1

天にまします我らの父よ

願わくは御名をあがめさせたまえ

御国を来たらせたまえ 御心の天になるごとく 地にもなさせたまえ

我らの日用の糧を 今日も与えたまえ

我らに罪を犯す者を我らが赦すごとく 我らの罪をも赦したまえ

我らを試みに会わせず 悪より救い出したまえ

国と力と栄えとは 限りなく汝のものなればなり アーメン。

* 頌 栄 68

あまつみたみも、地にあるものも、父、子、みたまの神をたたえよ。アーメン

* 祝 禱

後 奏 (黙禱)

子供祝福式

報 告 雨宮信長老 (司会・受付 次週：古澤兵庫長老)

本日 受付 1階：佐藤紀子・古澤迪子執事 2階：大日南信也執事 /ZOOMホスト・録音：大日南悠

次週 受付 1階：那珂信之・星野房子執事 2階：藤井牧子執事 /ZOOMホスト・録音：雨宮信

※ グループ制により、長老も1階と2階に一名ずつ加わります。

フィリピ1：18-26 「不屈の人たち」

福音にふさわしい

いよいよフィリピ書一章も最後の段落となりました。このところは、先週も少しお話ししましたように、これからキリスト者として生きていく、その場合に土台となることを語っているところです。一つ前の所のキーワードは「キリストに結ばれている誇り」でした。私たちはイエス様と一緒に生きていくことにおいて、堂々と生きていくものにもうなっている、ということをパウロが自分の生き方を通して教えてくれていました。これに続いて、いよいよ今日はまとめに入っているのですが、最初にパウロは「キリストの福音にふさわしい生活」を送るようと言います。イエス様を信じたものの生活、私たち教会に集う者の生活には、やはりそれにふさわしい生きがある、というのです。そして、この短い四つの節でそのような生き方を示そうとしているのです。

戦い？

そこで目に付きますのは、実は「戦い」という言葉です。例えば27節の末尾「共に戦っており」とあります。あるいは30節ではそのものずばり「あなた方は戦っています」で終わっています。このような言葉を聞きますと、私たちはドキリとします。教会は、愛のあるところではないのか、平和な気持ちになるところではないのか、「疲れたもの、重荷を負う者はだれでも私のもとに来なさい、休ませてあげよう」というのは嘘か。さんざん世間で戦って、たまの休みに教会に来たら、ここでも闘いか、だまされた、とおもわれたでしょうか。たしかに、教会は、ほっとする場所であるべきです。この世の戦いを離れて休みを得る、港のような場所でありたいと私も思います。しかし、そこでなおよく考えてみたいのです。私たちは、大切なもののためには、ずいぶんと戦っているのではないのでしょうか。お気楽なところでは、趣味やスポーツがあります。例えば、ゴルフのスコアを少しだけでも上げるために、テニスのサーブをピシッと決めるために、その他、色々ありえますが、遊びのためにでも一所懸命努力したり、道具に凝ったりするのではないのでしょうか。或いは、もっと世知辛いことと言えば、私たちは、今自分の持っている生活、仕事上の立場、地位を守るために、様々な努力をしているのではないのでしょうか。そのために全身全霊をかけているというのに近い努力をしているはずです。仕事の世界は厳しく戦いがあり、しかし同時に、そこにまた喜びもあります。

福音の中にいるために

それで改めて、「福音にふさわしく」という言葉について考えてみたいのです。福音は言うまでもなく、良い知らせです。私たちにとってこれ以上ないほどに嬉しい知らせ、それが本来の福音の意味のではありません。そこでなお問われるのは、私たちは、神様が味方だ、イエス様が私たちを神様と結び合わせてくださっている、ということについて、ドキドキしているか、ときめいているのか、ということです。難しいことを考える必要はないはずです。福音とは、わたしたちが神様と一緒に生きることができる、そこに計り知れない喜びがある、もっと言えば、これで生きていける、ホッと安心できる、そのような意味での良い知らせです。それを一度手に入れたら、間違ってもそれを手放してしまっただけはいけない、と一途に思い詰めるような、これがなくては始まらないものです。それは、福音書に書かれたイエス様のたとえ話では、高価な真珠を探している商人が、それを見つけると大喜びして全財産をはたいて買い取ってしまう（マタイ13：45）というように、ぜひともこれがなくちゃ、というくらい、喉から手が出るくらいほしい、と日々思い、ああ今日もイエス様と一緒に生きていく、と思っただけにやにやする、そんなありがたさが、福音にふさわしい生き方ではないか、と私は理解しているのです。しかし、むしろ、私たちは、未だにそこまで思い詰めていない、あるいは、こういう言い方がいいかどうかわかりませんが、道を究めていないのかもしれないのです。

霊において、心あわせ

有名な論語の言葉に「朝に道を聞かば、夕べに死すとも可なり」というのがあります。もし、朝に真理を知ることができたら、夕方死んでも嬉しい、というのです。それくらいに一途に福音が嬉しい、うれしくてたまらない、という所に目が開かれていくためには、実は戦いがある、日々戦いがある、このようにパウロは言っているように聞こえるのです。そして、福音の喜びを見つけていくためには、やは

りそれなりのやり方があるところのところで言っているのです。それは、27節の後半にある短い言葉です。「あなた方は一つの霊によってしっかりと立ち」。この場合の霊とは言うまでもなく、神様の霊、聖霊なる神のことです。私たちは、みんなそれぞれ違っています。例えば、この言葉の後に、「心をあわせて」と続いておりまして、これも元々の言葉を見ますと「一つ心で」と書いてあるのです。けれども、教会に集まります私たちは、それぞれに、年齢も境遇も、何をよしとするかという感性も違いますし、場合によっては政治的な立場すら同じではないかもしれないのです。そのようにそれぞれに違う私たちが、心ひとつになることなど、本来はあり得ないのです。そして、また、私たちは互いに個性を殺して、相手に合わせなくてはならない、ということでもないはずなのです。むしろ、このような私たちが、心を合わせていくことができるところがあると思えば、「福音いいね」というその一点なのです。そして、そのようにしてわたしたちが「福音いいね」と思える基盤はただただ、神様の霊によるしかないのです。

しっかりと立つ

そのような聖霊において、与えられる立場に私たちがそれぞれに腰を据える、それが、このところという「一つの霊にしっかりと立ち」という言葉の意味です。しかし、それにはもう一つの要素があります。それは、この「立つ」という言葉の反対としての「倒れる」状態の存在です。同じパウロの書きましたコリントの手紙にはこんな言葉があります。「だから、立っていると思う者は、倒れないように気をつけるがよい。」（1コリ10：12）。私たちはややもすると、「福音いいね」を忘れてしまう、そして全く別のものに気を取られてしまうことがあるようなのです。今日の所では、28節に「反対者たち」という言葉があります。もちろん、パウロは、具体的な反対者たちと向き合っていた、ということは言えるでしょう。しかし、ここでパウロがいう「反対者」、わたしたちが向き合う「反対者」は必ずしも、目に見える誰かではないようです。例えば、教会の活動を何かと妨げようとする人、あるいはそのような集団があって、そのような人たちをやっつければそれで済む、という話ではないのです。むしろ考え方の筋道としましては、エフェソ6章に登場します「支配と権威、暗闇の世界の支配者」（エフェ6：12）、一言で言えば悪魔とその一派、というほうが近いかもしれません。しかし、その場合でも、戦場はいつでも、私たち自身、あるいは私たちの心であるかもしれないのです。わたしたちが、「福音いいね」をついつい忘れ果ててしまい、信仰者として倒れてしまう、そのようなことがないように、私たちは、「福音」から離れない戦いをしていく、このようにパウロは言っているのです。

神による

しかし、ある意味では、その戦いの先行きは明るいのです。というのも、そもそもこの28節の示すところは、反対者への勝利だからです。もう一度28節を読んでみます。「どんなことがあっても、反対者たちに脅されてたじろぐことはないのだと。このことは、反対者たちに、彼ら自身の滅びとあなたがたの救いを示すものです。これは神によることです。」あまりこまごまとした説明はいらぬはずで、決定的な言葉があります。それは最後にあります「これは神によることです」の一言です。わたしたちが、「一つの霊にしっかりと立つ」そして、どんなことがあっても、たとえ、その時々において、心が痛んだり、揺れ動いたりすることがあったとしても、なお、たじろがない、そのようにして、悪魔が敗北し、私たちが勝利をしていく、この人生で信仰の勝利をつかみ取っていく、そのようなこと全体は誰によるのか、私たちの勝利を確かにするのは、私たちあるいは、私たちの努力ではなく、むしろ、神様ご自身である、これは大切なことなので、もう一度言います。わたしたちが、信仰を確かなものとしていくその歩み全体を実は神様が支えておられる、これが事実です。

恵である

考えてみますと、私たちは、人生のそれぞれの時に、様々なところを通らされます。今、教会員として大ベテランである方も、その信仰の始まりがあったのです。或いは、これから信仰に入ろうという方には、その人にしか見えていない景色があるはずで、それはそれぞれでよいのです。ただ私たちは、この地上を神様と共に、神様の祝福と共に生きていくためには、ただ、イエス様を信じただけでは終

わらない、そのようにパウロはここで語っているのです。29節にあります「キリストを信じるだけではなく」というのは、その意味で「信じてそれで終わりではない」と言っているように聞こえます。むしろ、信じたら、それがもっと深まるように、もっと生き生きとするように、もっと嬉しくなるように、もう、うれしくてうれしくて、イヒヒと言ってしまうくらい、楽しくなるように戦っていこう、と言っているのです。それが、「キリストのために苦しむ」という言葉の意味だと私は理解しています。丁度、ゴルファーが会心のショットを決めるために日々トレーニングに努めるのように、そのためにからだをいじめるように、より神さまに近付くために、日々余計なものを捨てていく、自分自身の中にある不信仰な思いを見つめ、祈りを重ねていく、ということがあるはずだということです。そして、実は、このような意味で、わたしたちが、信仰の研鑽を重ねていくこと自体が、実は、一歩、一歩「福音いいね」に近付いていく恵の時だ、とパウロは言うのです。それが「恵みとして与えられている」という言葉の意味です。

パウロの戦いと同じ

そしてそのような戦いは、ただ、私たちが、一人でするものではなく、むしろ、みんなで一緒にやっ
て行くものだ、私たちは以前から、このような戦いをしてきたのをあなた方は見てきたし、今も、こう
して、牢獄から出された手紙を通して聴いているけれども、あなた方も、私と同じ戦いを一緒に励まし
合いながら続けているでしょう、ということです。私たちは、それぞれに与えられたところで、この戦い
を続けていくのです。それは、一つの霊によってしっかりと立ち、互いに一つ心になって、みんなで「福
音いいね」と声を合わせていく戦いです。

不屈の人たち

このようにして、わたしたちは、みんなで福音を喜び合う群れを造り上げていくことができます。神
様によって支えられ、粘り強く戦いを続ける時に、私たちは、不屈の勇者になることができます。その
ようにして、福音の戦いが続けられるのであれば、私たちのこの教会は、今までの祝福に加えてますます
神様の祝福があふれる教会としての姿をいよいよ現わしていくことになるのです。

祈り

父なる神さま。あなたは、私たちそれぞれに、キリストをすく主と信じる信仰を与えてくださいまし
た。また、そればかりではなく、私たちの心の目を開いて、福音が本当に福音であって、私たちを生か
すものであることへと目を開かせようとしてくださいますから感謝します。そうです、これがあなたの
恵みです。どうぞ、わたしたちが、この恵みの鍛錬に与って、ますますあなたを喜び、また互いに心を
一つに合わせてあなたのご栄光を表すものとされますように。この週のあゆみにもあなたの導きを豊
かに与えてください。主イエス・キリストのみ名によって祈ります。アーメン。